

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26503011

研究課題名(和文) 博物館における「負の記憶」の展示表象とその成立プロセスに関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Study on the Representation of "Negative Memory" in Museums and its Formation Process

研究代表者

金子 淳 (KANEKO, Atsushi)

桜美林大学・人文学系・准教授

研究者番号：00452178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦争や公害、災害といったいわゆる「負の記憶」が、博物館展示という場においてどのように表象され、その展示空間にはどのような政治的な力学が作用しているのかを明らかにするため、国内外の博物館を対象として調査を行った。こうした「負の記憶」をどのようにして未来に生かしていくのかという問題意識のもとで「記憶の継承」を主眼に据えたさまざまな取り組みも行われており、「負の記憶」は、単に過去の事象にとどまるのではなく、「未来の表象」へと直結する課題であることが浮き彫りになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, in order to clarify how "negative memories" such as war, pollution, disaster are represented in museums and what kind of political force is acting on the exhibition, I investigated museums in Japan and overseas. Also, in order to make use of "negative memories" for the future, various practices for "succession of memory" were performed. And it was highlighted that "negative memories" lead not only to past events but also to "representation of the future".

研究分野：博物館学

キーワード：博物館 展示 表象 記憶

1. 研究開始当初の背景

博物館における展示は、単に博物館の展示担当者(主に博物館の専門職員である学芸員)の学術的な専門性のみに基づいて決定されるのではない。実際にはむしろ、外部の政治的組織や種々の団体による介入、目に見えない社会的圧力、さらには博物館内部もしくは主管部局との対抗関係など、さまざまな要因が絡み合いながら政治的に形成される。

特に、社会的な立場や所属する集団によって価値観の振幅が大きく変動する「負の記憶」については、こうした傾向が露骨に現れやすい性質を持つ。したがって、「負の記憶」の展示の成立過程を考えるためには、多様な背景を持つ集団による政治的なせめぎ合いのプロセスとして捉える必要があり、その調整過程の検証が不可欠である。

こうした博物館や展示のもつ政治性については、欧米の英語圏においては1970年代から指摘されるようになり、日本においても1980年代以降、文化の権力性・政治性への関心の高まりとともに盛んに論及されることが多くなってきた。今日の展示表象の議論においては、展示の政治性への着目がもはや不可欠な前提にすらなっている。

本研究も基本的にはこうした流れの延長線上に位置づけられるが、展示の政治性に関する既往の研究においては、理論構築の面では一定の成果が得られてはいるものの、展示の「現場」に軸足を置きつつ、展示手法を含めた具体的な展示内容に踏み込んで分析するという、実証的なスタンスによる研究は少ない傾向にあった。本研究は、こうした現状を踏まえて着想したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦争や公害、災害といったいわゆる「負の記憶」が、博物館展示という場においてどのように表象され、その展示空間にはどのような政治的な力学が作用しているのかを実証的に明らかにすることである。

「負の記憶」は、立場によって価値観の相違や対立を含んでいるため、その展示は外部のさまざまな組織との間の調整や交渉によって規定され、ときには展示内容をめぐって特定の記憶のあからさまな排除や隠蔽さえ行われる。

本研究においては、こうした権力行使のプ

ロセスに注目し、さまざまな要因のもとで規定される「負の記憶」の展示空間形成のメカニズムを、いくつかの事例に基づきながら実証的に解明することを目指す。具体的には、どのような背景を持つ集団が、いかなる意図のもとに、展示をめぐるイニシアティブを奪取しようとしたのか、そのプロセスを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、具体的な博物館の展示を調査対象とするため、次の三つのアプローチに基づいて研究を進めた。

博物館がそのテーマを選定する際のプロセスや実際の展示のようすの把握につながる文献の入手

実際の展示内容やその手法に関する分析学芸員や関係者、来館者への聞き取り調査

このうち は文献調査であり、各博物館において発行されているガイドブック、展示図録、パンフレット、研究紀要など、各感の活動状況に関する文献など多岐にわたる資料収集を行いつつ、研究課題全般に関する把握に努めた。

については、現地調査が中心となった。国内・国外の博物館を対象とし、実際の博物館における展示を調査することで、その実態や傾向の解明を進めていった。

は、実際には と併用しながら行うことになるが、博物館等を訪問した際に関係者からの聞き取り調査を実施し、より多面的なデータの収集を行った。

4. 研究成果

(1) 災害の表象

まず、公害展示の事例として、四日市公害に関する現地調査を実施した。三重県四日市市では「四日市公害と環境未来館」が2015年3月にオープンしたが、開館に先立って現地における公害の記憶の状況を調査し、実際の展示との関係や反映状況を検証する際の基礎データを得た。さらに、オープン後にあらためて実際の展示調査を実施した。この現地調査において得られた知見の一部は、後に論文として発表した(後述)。

一方、震災関連に関する展示調査もあわせて実施した。奇しくも研究年度が阪神淡路大

震災20周年に該当していたため、とりわけ震災関連の展示が多く、これらの展示から「負の記憶」に関する展示のメッセージや手法等について、その概要や傾向を把握することができた。

また、東日本大震災の被災地において災害の記憶がどのように展示されているかを確認するため、岩手県、宮城県の被災地を調査した。岩手県大船渡市における津波被害のようすを伝えるために民間の有志によって設立された「大船渡津波伝承館」では、設立に際して中心的な役割を担った館長に聞き取り調査を行った。また、陸前高田市の震災遺構や、宮城県気仙沼市の「唐桑半島津波体験館」「リアス・アーク美術館」において震災に関わる展示の調査を行うとともに、関係者に聞き取り調査を行った。東日本大震災と博物館の関連については、別途資料集としてまとめた(入稿済み、印刷中)。

(2) 戦争の表象

博物館における戦争の表象に関する現地調査として、アジア太平洋戦争期に日本の占領地となったシンガポールにおいて、博物館展示や戦跡に関する調査を実施した。シンガポール国立博物館、アジア文明博物館、日本占領時期死難人民記念碑等を対象に、日本の占領や虐殺等の「負の記憶」がどのように表象・展示されているかを調査した。

特にシンガポール国立博物館では、日本占領期に「昭南博物館」と改称され、日本人の手によって運営が担われていた時期の展示について詳細なデータを得ることができた。モダンなイギリス植民地時代と戦後の経済成長の間に、日本統治期の「昭南島」時代がはさまれるという展示構成は、まさしく「暗黒の」という形容がふさわしい内容であり、「日本人からの暴力と嫌がらせに苦しめられた」と説明するパネルのもとで、現地人に対して日本語の使用を強要した皇民化教育に関する展示や、戦争捕虜(POW: prisoner of war)として抑留された連合軍の兵士に関する展示がなされるとともに、後に続く、日本降伏を喜ぶ大勢の子どもたちの笑顔の写真との落差をより際立たせていた。イギリスの植民地から日本の占領を経てマレーシアからの分離に至るシンガポールの歴史の中で、日本占領期における「負の記憶」が今もなお影を投げかけて

おり、展示内容にも大きな影響を与えていることが明らかになった。

あわせて、日本占領期の戦跡や慰霊碑等についても調査を行った。とりわけ1942年のシンガポール架橋粛清事件(「シンガポール大検証」)における犠牲者をはじめとした日本占領期の戦没者追悼を目的に1967年に建設された「日本占領時期死難人民記念碑(血債の塔)」のように、戦争責任の問題を抱えながら現在においても政治の争点とされている実態を具体的に把握することができた。

これらの調査の成果は、筆者の勤務する大学において公開授業として報告の機会を設けるとともに、「シンガポール国立博物館における戦争の展示と『昭南博物館』の記憶」として発表した。

(3) 「未来」の表象

上記の調査を通して派生的に生じてきた課題が、過去における「負の記憶」の先にある「未来」をどのように表象し得るか、ということであった。「負の記憶」に関する展示においてはしばしば「未来への贈り物」「未来へつなぐ記憶」など、「未来」の存在が前景化される。つまり、「負の記憶」を過去のものとさせずに、「未来」へどのように託すかが主要な課題として突き付けられることになるわけである。

そこで、博物館において「未来」がどのように表象され、どのような課題を見出し得るのかについて、主に歴史系博物館の展示を事例に検討した。その結果、いくつかの傾向と問題点が浮かび上がってくることとなった。

歴史系博物館においては、「過去から未来への展望」、「過去・現在・未来を結ぶ」のように、常設展のテーマに「未来」が含まれているケースが多い。通史展示の締めくくりに際しておさまりが良く、かつ余韻を残せるような都合のいいスローガンとして「未来」という言葉が選択されている。ところが、実際の常設展示における展示構成を調査したところ、基本理念や展示テーマなどで「未来」を高らかに謳っていても、通史展示において未来までは射程に入っていないケースがほとんどであり、展示内容としての未来は実のところ「不在」であるという傾向が明らかとなった。

しかしその一方で、歴史展示の中で積極的に未来を取り上げているケースも散見され、

その一つが、子どもの絵を並べて未来を象徴させるという展示であった。子どものイマジネーションが未来そのものを映し出しているという見立てのもと、歴史展示の一環として未来を可視化するために、子どもを媒介にするという手法を用いたと考えられる。調査の結果、その背景に、子どもという存在が無色透明で価値中立的であるかのようにみなされるために、子どもを媒介することで価値観の相違が目立たなくなり、「無難」な未来像を描き出しやすいという判断があることが確認された。

未来を展示するもう一つの方法が、「意見の展示」とでもいうべきもので、来館者の意見をコンピューターに入力するか紙に手書きしてボードに貼るなどして公開・共有され、それが展示の一部を構成するという仕組みのことである。展示調査を実施した「四日市公害と環境未来館」にはこうした「意見の展示」があったものの、実際には、「へいわ」とか「幸せになりますように」といった、七夕の短冊に書かれるような単純で抽象的な願いごとが多い傾向にあった。

これらの調査の成果は、「歴史系博物館における『未来』の表象」としてまとめ発表した。そこで課題として浮かび上がってきたのが、未来を構想していくための現実的な「選択」の問題であった。「現在」は、過去における具体的な選択の無数の積み重ねによって成立するものであり、同様に、「未来」も現在から先の具体的な選択の集積である。したがって、「未来」に向けての現実的な選択肢は、七夕の願い事的な単なる「希望」ではなく、リアルで切実で時には苦痛を伴う、われわれ自身の「選択」の問題である。これまでの研究成果を踏まえれば、展示においてこれからの社会を構想していくための無数の現実的な選択肢を具体的に考える場にすることが重要であり、そのような苦痛すら伴う未来への具体的な選択を、どのようにして「実践」や「行動」につなげていけるのか、と問い続けることこそ、社会的で公共的な性質をもつ展示というメディアが担うべき重要な課題であることが改めて浮き彫りとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

金子 淳、シンガポール国立博物館における戦争の展示と「昭南博物館」の記憶、博物館/文化遺産から社会・歴史を読み解く、2016年度、桜美林大学リベラルアーツ学群博物館学専攻、査読無、2017年、pp.183-191

金子 淳、大学祭におけるゼミ展示「博物館の裏側へようこそ」の成果と課題、博物館学芸員課程年報、18号、桜美林大学教職センター博物館学芸員課程、査読無、2017年、pp.3-10

金子 淳、地域博物館における「転回」への視座 伊藤寿朗「地域博物館論」の検討を中心に、明治大学学芸員養成課程年報、31号、査読無、2016年、pp.13-21

金子 淳、歴史系博物館における「未来」の表象、桜美林論考 人文研究、7号、査読有、2016年、pp.21-35

金子 淳、郊外における人口移動と居住地選択プロセス 人口移動研究の学際的アプローチを中心に、国立歴史民俗博物館研究報告、199集、査読有、2015年、pp.67-86

金子 淳、原子力をめぐる展示とコミュニケーション 博物館における負の記憶の展示との関連から、生物学史研究、91号、日本科学史学会生物学史分科会、査読無、2014年、pp.119-121

〔学会発表〕(計4件)

金子 淳、新しい学芸員養成制度における博物館と大学の「連携」、2016年10月6日、帝京大学博物館

金子 淳、博物館の実践と研究の現場から、2016年9月10日、千葉大学教育学部

金子 淳、地域博物館における「転回」への視座 伊藤寿朗「地域博物館論」の検討を中心に、日本の地域博物館シンポジウム、2015年12月19日、明治大学

金子 淳、原子力をめぐる展示とコミュニケーション 博物館における負の記憶の展示との関連から、日本科学史学会生物学史研究会、2014年4月6日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕(計3件)

金子 淳、博物館、社会教育・生涯学習ハンドブック第9版、エイデル研究所、印刷中

金子 淳、ニュータウンにおける経験のちそ

うと語りの実践、歴史と向きあう社会学
資料・表象・経験、ミネルヴァ書房、2015
年、pp.153-174

金子 淳、日本の博物館論の展開、博物館の
理論と教育、博物館の理論と教育、2014年、
朝倉書店、pp.127-168

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

金子 淳 (KANeko, Atsushi)

桜美林大学・人文学系・准教授

研究者番号：00452178

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし